

比 恵 73

— 比恵遺跡群第 133 次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書 1295 集

2 0 1 6

福岡市教育委員会

比 恵 73

— 比恵遺跡群第 133 次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書 1295 集



遺跡略号 HIE-133

調査番号 1417

2 0 1 6

福岡市教育委員会

序

玄界灘に面し古くから大陸との文化交流の玄関口であった福岡市には、豊かな自然と文化が残されています。の中でも博多区は大陸との交流で古くから栄え、遺跡も多く存在しています。これらを保護し、未来へと伝えていくのは本市に課せられた責務であります。しかし、近年の著しい都市化による市街地の拡大により、その一部が急速に失われつつあることもまた事実です。福岡市教育委員会は開発によってやむを得ず失われていく遺跡について、事前の発掘調査を行い、記録の保存に努めています。

今回報告する比恵遺跡群の発掘調査報告書は宗教施設建設に伴う調査成果についての記録です。この調査では弥生時代から中世の集落と溝、河川を確認しました。本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となり、また研究資料として御活用頂ければ幸いに存じます。

最後に発掘調査から報告書の刊行に至るまで、多くの方々のご理解とご協力を賜りましたことに対して心から謝意を表する次第であります。

2016年3月25日

福岡市教育委員会

教育長 酒井龍彦

例言

- 本報告書は博多区駅南4丁目163番1の宗教施設建設工事に伴って2014年7月14日から2014年11月28日にかけて発掘調査を行った比恵遺跡群第133次調査の報告書である。
- 本書に収録した発掘調査は福岡市経済観光文化局の屋山洋が担当した。
- 遺構実測は佐々木蘭貞・吉田大輔・屋山が、写真撮影は屋山、遺物実測と製図等を濱石正子・翻田則子・大庭友子・屋山が担当した。
- 本書で用いた方位は磁北である。
- 本書に関わる図面・写真・遺物など一切の資料は福岡市立埋蔵文化財センターに收藏・保管される予定である。

遺跡調査番号	1417	遺跡番号	0127	分布地図番号	東光寺37
調査地地番	福岡市博多区博多駅南4丁目163番1				
開発面積	1.451m ²	調査面積	1.108m ²	調査原因	宗教施設建設
調査期間	20140714	～	20141128	担当者	屋山 洋

目次

Iはじめに	1
II調査の記録	4
1. 調査の経過	4
2. 調査の概要	4
3. 遺構と遺物	4
1) 贯藏穴	4
2) 墓棺	4
3) 竪穴式住居	6
4) 土坑	8
5) 溝および自然流路	8
6) 杭列	24
4. 小結	24

挿図

第1図 周辺遺跡分布図	2
第2図 調査地点位置図	2
第3図 周辺調査図	3
第4図 調査範囲図	3
第5図 全体図略図	5
第6図 贯藏穴遺構・遺物実測図	6
第7図 墓棺遺構実測図	7
第8図 墓棺遺物実測図	8
第9図 竪穴式住居遺構・遺物実測図	9
第10図 土坑・溝、遺構・遺物実測図	10
第11図 溝土層実測図1	11
第12図 溝土層実測図2	12
第13図 溝出土遺物実測図1	13
第14図 溝出土遺物実測図2	14
第15図 溝出土遺物実測図3	16
第16図 溝出土遺物実測図4	17
第17図 溝出土遺物実測図5	18
第18図 旧河川土層実測図1	19
第19図 旧河川土層実測図2	20
第20図 杭列平面実測図	21
第21図 杭列B・C実測図	22
第22図 杭列D・E・F実測図	23
第23図 杭列H・I・J実測図	24

付図 比志遺跡第133次調査区全体図(1/500)

表

比恵遺跡第33次調査 遺構一覧 1	25
比恵遺跡第33次調査 遺構一覧 2	26

図版

図版 1

1. I区全景(東から)
2. SC01(南から)
3. SP022柱痕跡(西から)
4. SP011柱痕跡(北から)
5. SP013柱痕跡(南から)

図版 2

1. SP029柱痕跡(北から)
2. SP092柱痕跡(南から)
3. I区北側溝(東から)
4. SD009青銅製鍔先出土状況
5. SD009溝底面遺物出土状況(北西から)
6. SK057遺物出土状況(南西から)
7. SD024遺物出土状況(北西から)
8. SD084遺物出土状況(南東から)

図版 3

1. SD028(北から)
2. 桟列B(南東から)
3. 桟列C(南西から)
4. 桟列D(南から)
5. 桟列D(北から)
6. 桟列E(西から)
7. 桟列G(北から)
8. 桟列I(南西から)

図版 4

1. SD028西壁土層(東から)
2. SD028北壁土層(南から)

図版 5

1. SD001(西から)
2. SD001土層(北から)
3. SD024・025(西から)
4. SD024上層(西から)
5. SD025土層(西から)
6. SD052土層A(南西から)
7. SD052土層B(西から)
8. SD074(北から)

図版 6

1. II区全景(北東から)
2. SD058土層(南西から)
3. SD071・072切あい(北から)
4. SD071土層(北東から)
5. SD072-1土層(北から)

図版 7

1. SD072-2(西から)
2. 貯蔵穴南側土層(東から)
3. 貯蔵穴北側土層(東から)
4. 貯蔵穴完掘状況(北東から)
5. ST097・096土層(北から)
6. ST097・096(北から)
7. SK081(西から)
8. SK086(西から)

図版 8

1. III区全景(南西から)
2. III区東側拡張部(西から)

I. はじめに

1 調査に至る経緯

平成26年(2014年)2月21日付けで宗教法人念佛宗三寶山無量壽寺から博多区博多駅南4丁163番1の寺院建設に伴う埋蔵文化財有無の事前調査依頼(25-2-1220)が提出された。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である比恵遺跡群内に位置し、申請地を囲む隣接地でも31次、71次、83次、106次等の調査が行われている。また当地においては平成19年にも事前調査依頼(19-2-800)が出されており、この時の確認調査で地表面から90cm下で遺構を確認していた。これらから埋蔵文化財審査課では建設に先だって埋蔵文化財の発掘調査を行い、記録保存を図ることが必要であると判断して原因者と協議を進め、平成26年7月14日から11月28日にかけて発掘調査を行った。調査期間中は廃土の搬出や水道の設置など原因者及び関係各位の多大なご協力を頂いた。記して感謝したい。

2 調査の組織

調査主体 福岡市教育委員会(発掘調査 平成26年度 : 整理報告 平成27年度)

調査統括 福岡市経済観光文化局文化財部埋蔵文化財調査課

埋蔵文化財調査課長 常松幹雄 (平成26・27年度)

同課調査第1係長 吉武 学 (平成26・27年度)

庶務 埋蔵文化財審査課審査係 川村啓子 (平成26・27年度)

調査担当 埋蔵文化財調査課 屋山 洋

作業員 阿部純子 阿比留一郎 岩佐克行 江浜明徳 緒方圭子 囲部安正

岡村まさか 河原明子 児玉和美 近藤英彦 坂口壽美子 須佐恵司

節政善憲 芹川純子 田尻由紀子 田端名恵子 富岡洋子 永松弘恵

西藤勝喜 野内聖司 伊山恵子 吹春憲治 中村健三 竹内武俊 安武陽子

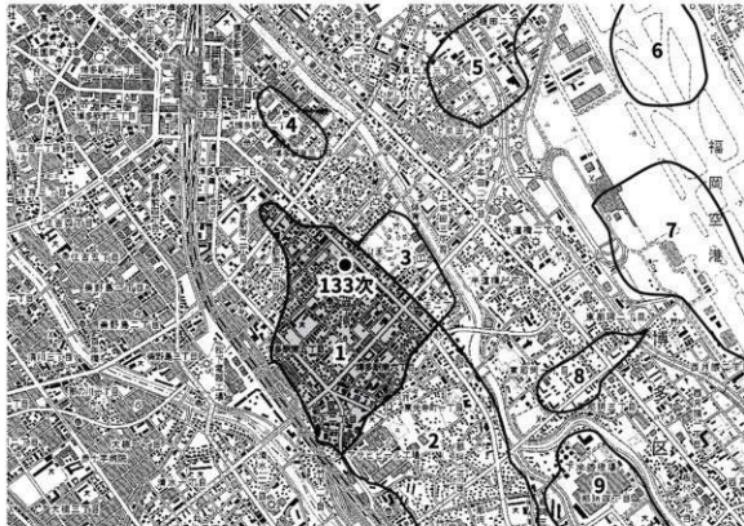
山下直美 山田美恵子 鶯崎哲夫 鶯津真二郎 脇田誠二 迎健司

坂梨美紀 松下さゆり 日高芳子 三島和花子 熊埜御堂早和子

整理 大庭友子 坂口龍子 脇田則子

3 調査区の立地と環境

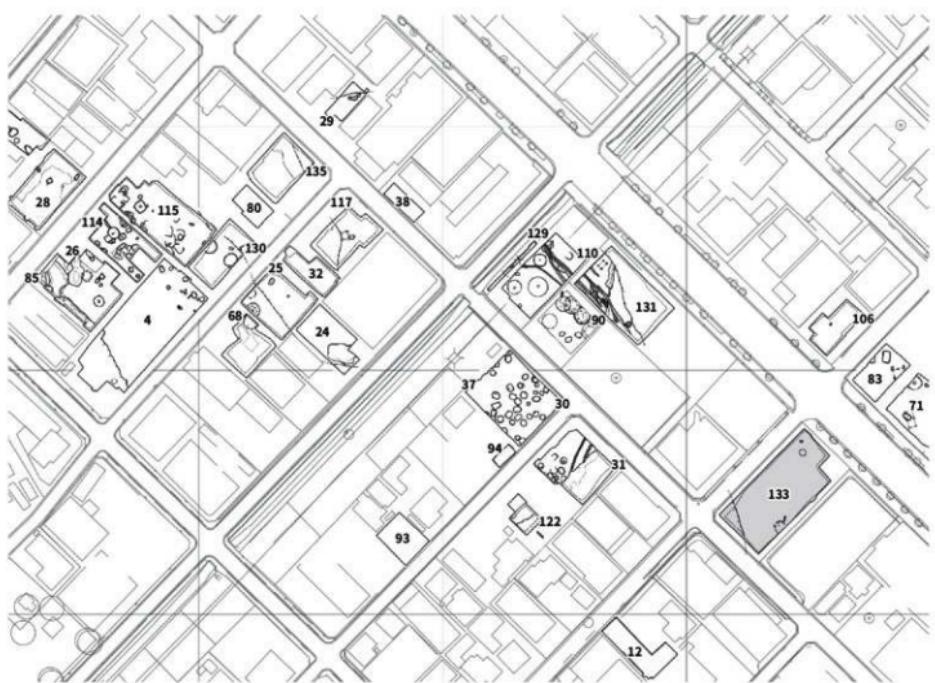
比恵遺跡群は福岡平野の中央を博多湾に向かって流れる那珂川と御笠川に挟まれた標高5~10mの低位丘陵上に立地する。丘陵は花崗岩の風化礫層を基盤とし、その上に堆積した阿蘇山の火碎流である八女粘土層と鳥栖ローム層からなる。近隣の遺跡としては春日市から博多湾に向かって伸びる同一の丘陵上に博多湾側から比恵遺跡群、那珂遺跡群、五十川遺跡、井尻B遺跡、寺島遺跡、須玖岡本遺跡と続く。奴国を中心とする春日市の須玖遺跡群一帯と博多湾を結ぶ連続した丘陵上に弥生時代の遺構が多く分布しており、青銅製品が多く出土すると共に鑄型や坩埚など青銅器鋳造関連遺物が多く出土する地域である。比恵遺跡群は南側に隣接する那珂遺跡とは浅い谷で区分されている。遺物は旧石器時代のナイフ型石器が出土しているが、遺構は現在縄文晩期の突帯文期の遺構が最も古く、丘陵縁辺に分布する。弥生時代中期以降は集落は丘陵全体に広がり、奴国の拠点集落のひとつとなっている。古墳時代後期から古代にかけては遺跡北半に『那津官家』とされる大型掘立柱建物とそれを囲む柵列が築かれるようになる。



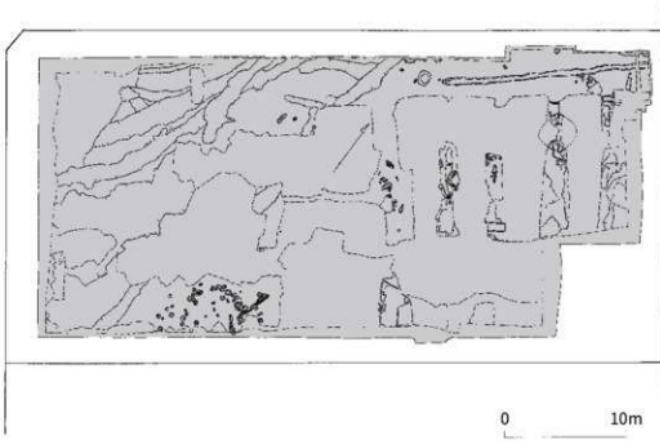
第1図 周辺遺跡分布図(1/25000)



第2図 調査地点位置図(1/4000)



第3図 周辺調査図 (1/2000)



第4図 調査範囲図 (1/400)

II. 調査の記録

1 調査の経過

申請地である博多駅南4丁目163番1の敷地面積は1451.8m²を測る。敷地のほぼ全体が調査対象地であるが、調査時には壁面崩壊防止のため敷地端から幅1.5m程引いて調査区を設定した。また、東南端に設置したプレハブ部分に関しては周囲の調査終了後に取り壊して調査を行う予定であったが、調査区南東縁沿いで検出した幅7m、深さ2mの擾乱がプレハブ部分の地下まで伸びて遺構が存在しないことを確認し、そのまま埋め戻して調査を終了したため実際の調査面積は1108m²となった。発掘調査は施土処理の必要性から調査区を西側からI～III区に分け、I区から調査を行った。作業工程はまず原因者によるプレハブやトイレの設置と敷地全体の20cmの表土掘り下げ、土の搬出を行った後、7月14日に機材の搬入、14～16日にI区の表土剥ぎを行って調査を開始した。地表から90cmで鳥栖ロームに達したが、鳥栖ローム直上は厚さ20cm程の近現代耕作土と床土で、その上70cmは現代の盛土である。調査区北西隅で古墳時代頃の旧河川が出土したが、底面が八女粘土で軟質な上に雨による水没が続いたため調査は難航した。9月1日から9月13日までII区、9月16日から11月の上旬までIII区の調査を行い、その後出土した遺物の洗浄を行った。11月17・18日に埋め戻し、11月20日に機材の搬出を行って調査を終了した。

2 調査の概要

調査区北西隅で旧河川(SD028)が出土した。北側の131次調査では河川と大規模な井堰が出土しており、それから続く河川の可能性がある。131次では古墳時代前期に粗砂によって埋没しているが、133次では中世には岸から4m程離れて河川が流れている。岸から離れたSD028と台地上の溝を繋げるため、SD028の埋没した部分に溝を掘りこむ際に行った護岸に伴う木杭が出土した。台地上では竪穴式住居(SC01)や貯蔵穴1基(SK095)、甕棺1基(ST097)が出土しており、弥生時代中期前半に集落が形成されている。古墳時代～古代にかけては台地西側に7条の溝が見られるのみで、その後古代後半から中世になると、再び集落が形成されている。西端に近い竪穴式住居は床面まで削平を受けており柱穴のみの出土である。また甕棺も上半が削平されていて、水田造成の際に全面的に削平を受けたことが判る。本来西側に緩やかに傾斜していたと思われ、東側の方が削平を強く受けている。

3 遺構と遺物

1) 貯蔵穴 調査区東側で1基出土した。弥生時代前期の貯蔵穴が多く出土した31・37次調査とは100m程離れており、独立した貯蔵穴群が存在した可能性がある。

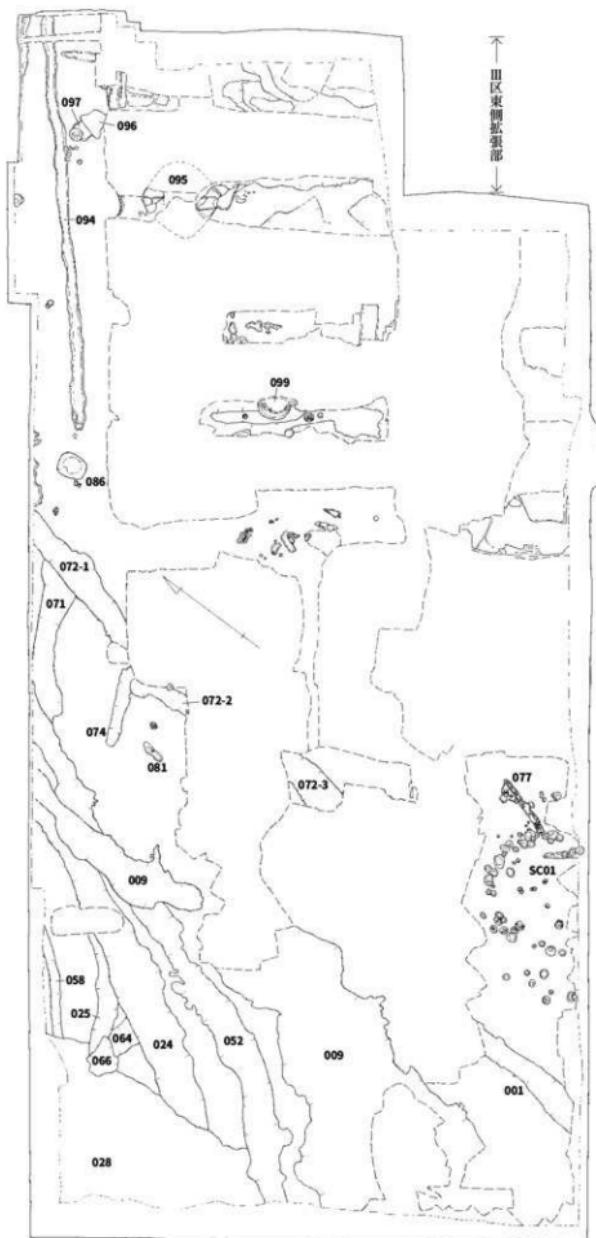
SX095 (第6図) 中央部に削平をうけ、南北2つに分断されている。平面形は円形もしくは楕円形と思われ、現状では径3.2m程と推定される。断面は南側壁の上がややせり出しており、フラスコ状を呈す。底面の南東端には幅8cm、深さ4cm程の溝があり、北側端部もゆるかな凹みがみられる。中央部に水が貯まらないための凹みと考えられる。埋土は底面直上に黒色土が堆積しており、貯蔵穴の放棄後しばらくは開口した状態で、その後壁の崩壊や土砂の流入と黒色土化を繰り返しながら埋没している。出土遺物(第6図001～004)。001は壺底部、002・003は甕口縁、004は甕底部である。弥生時代中期前半頃に廃棄されたと考えられる。

2) 甕棺 調査区内で1基出土した。東側の筑紫通りを挟んだ106次調査で中期中頃の甕棺が1基出土しており、関連する甕棺群である可能性がある。

道路

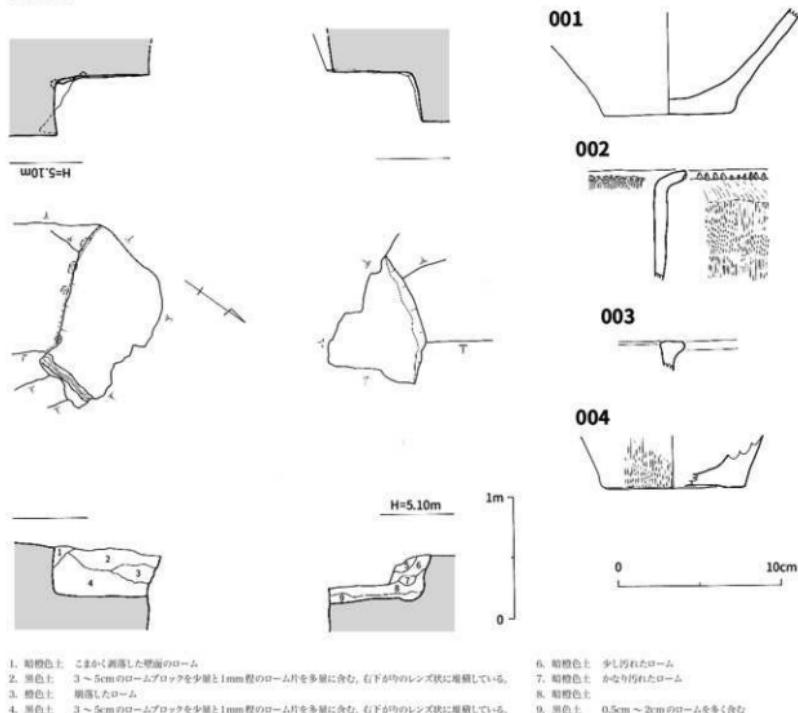
5m

0



第5図 全体図略図 (1/200)

SK095



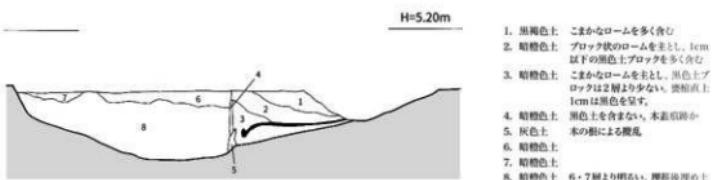
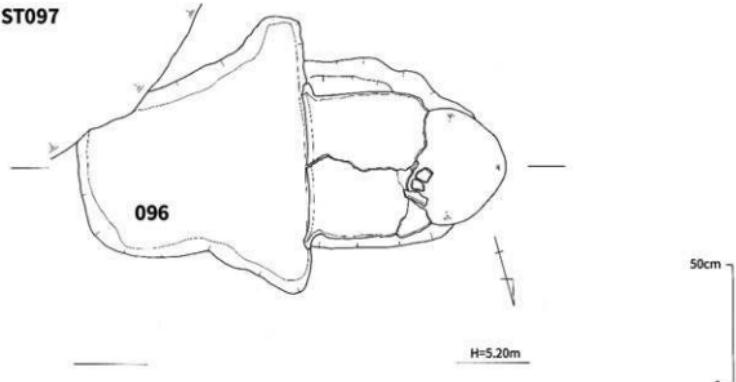
第6図 貯藏穴遺構・遺物実測図(1/40・1/3)

ST097 (第7図) 調査区北東のIII区抵張区に位置する。単館で主軸をN-73°Wとする。ほぼ水平に埋置されており、上側2/3を水田造成時に、底部を攪乱によって削平されている。096は097を埋納するための竪坑で、096を掘り下げるから横穴を掘って甕棺を差し入れている。096と097の境界が直線的なのは、土層観察から甕棺を入れた横穴自体を木蓋で塞ぐためであったと考えられる。竪坑は少し汚れたローム（橙褐色土）で、埋葬後すぐに埋めたものである。第8図の005は甕棺の実測図である。復元口径67cm、残存高54cmを測る。口縁上面に粘土帶を貼り付け、上下の突端部に刻み目を施す。外面は橙色からぶい黄橙色で黒斑がみられる。内面は明黄褐色からぶい黄橙色を呈す。口縁下に2条の沈線、胴部に3条の沈線を施し、その間を4条の沈線で結ぶ。胴回りは約1/2残存しており、綫方向の沈線は2カ所で確認した。外面は沈線から上がナデ、下は横方向のミガキ、内面は道具を使用したナデを施す。弥生時代中期前葉に位置する。

3) 窪式住居 調査区南西側で円形に並ぶ柱穴群と壁溝と思われる溝を確認した。

SC01 (第9図) 住居の床面は削平されて残っていない。柱穴群は径4.5m程の円を描くように並ぶ。

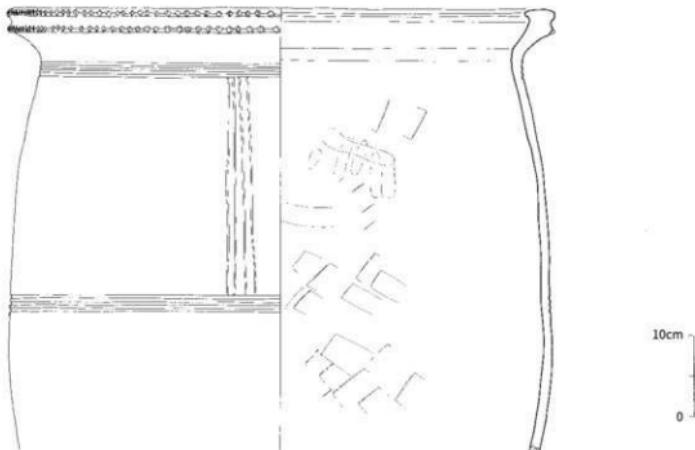
ST097



第7図 豊棺遺構実測図（1/20）

柱穴は径20～50cmを測る。柱穴には切り合が見られ、また1～1.3mの間に3～4基の柱穴が集中するなど柱穴の配列には規則性が見られる。近くでは43次調査で円形に柱穴が並ぶ竪穴式住居が数軒確認されている。43次の柱列の径は4～6m前後を測り、ほぼ同規模である。出土遺物（第9図006～008）。006は甕口縁、007は壺口縁である。弥生時代中期前半である。

SD077（第10図）SC01の東側で確認した長さ2.7m、幅16～31cm、深さ1～2cmの溝で主軸はN-16°-Eを測る。溝の西側に浅い掘り込み（076）があり、溝が竪穴式住居の壁溝、浅い掘り込みが床面下の掘り込みである可能性がある。遺物は077から土器小片1点、076から（第10図008）が出土した。外面はヘラケズリでヘラ記号状の沈線が2本あり、内面はナデと思われる。土師器壺蓋の可能性があるが、詳細は不明である。壺蓋とすると6世紀前後と思われる。



第8図 銀棺遺物実測図（1/6）

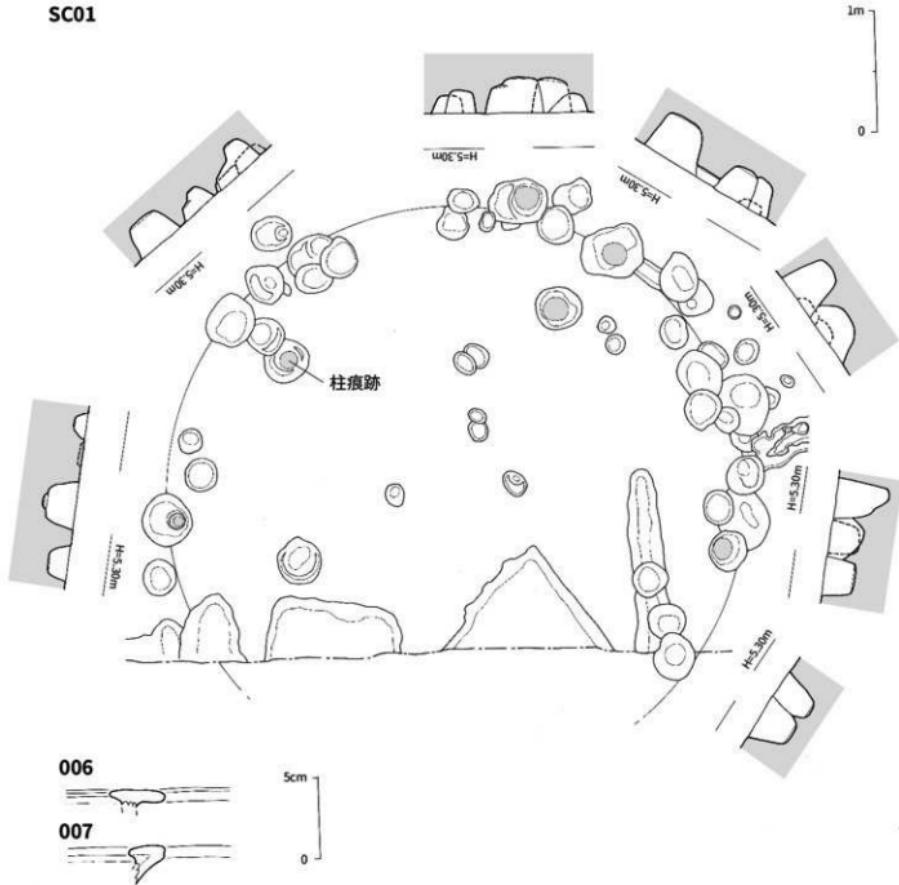
4) 土坑

SK081 (第10図) 調査区中央の北西寄りに位置する。平面は細長い楕円を呈し、長さ99cm、最大幅33cm、深さ27cmを測る。主軸はほぼ南北である。小口からみた断面は逆台形を呈す。底面は中央から北寄りに窪みがある。窪み中央の底面から7cm程浮いた状態(南北両側の底面とほぼ同じ高さ)で完形の土師壺が1点出土した。埋土は2層に分かれ、土師壺から下の底面窪みにはブロック状に砕かれたロームが詰まっており、土師壺から上は暗灰褐色土で埋まっていた。その形状から土壤墓の可能性が考えられる。出土した土師壺(第10図009)は口径12cm、底径8.4cm、器高2.4cmを測る。浅黄橙色を呈し、胎土に白色細砂粒と雲母片を少量含む。14～16世紀頃か。他に染付小片を1点含むが遺構に伴うか不明である。

SK057 (第10図) 1区で出土した。遺構上面に河川堆積の粗砂が被っていた。平面形がやや不整形なため、人的な掘込みではなく河川底面の窪みの可能性がある。長径87cm、短径52cm、深さ40cmを測る。断面は逆台形を呈し、北東側に底面から10cm上でテラスをもつ。土坑内は河川による粗砂が詰まっており、その間に土器小片が多数含まれていた。土器片は摩耗が激しく、流れによるローリングを受けたものと思われる。時代が不明な土器が多いが、第10図010は土師甕片である。橙色を呈し、表面は細かな格子状のタタキ、内面はナデを施す。胎土中に白色砂を含む。011は安山岩製で握斧か。縦10.5cm、幅9.7cm、厚さ4.8cmを測る。図の左側には自然面が残る。

SK099 (第10図) II区とIII区の境界に位置する。北東側を擾乱により削平されている。現状で長径133cm、深さ48cmを測る。南西側壁面に底面から5～32cmの高さにテラスをもつが、テラスは凹凸が激しい。遺物(第10図012)は龍泉窯系青磁碗で外面に細型連弁を施す。16世紀頃と考えられる。

5) 溝および自然流路 調査区の西端で自然流路と思われる溝(SD028)が出土した。溝の方向から131次調査で出土した古墳時代前期に埋没したとされる溝に続く可能性がある。131次調査の旧河川では大規模な井

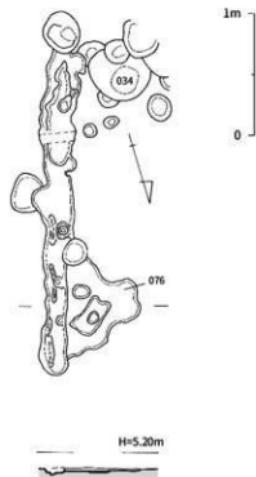


第9図 横穴式住居遺構・遺物実測図 (1/40・1/3)

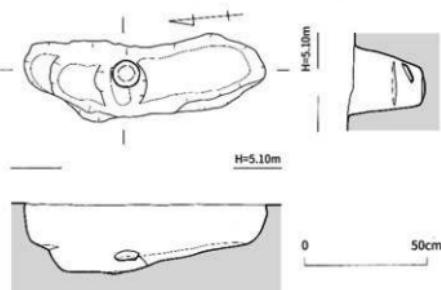
堰が出土しており、そこから出土した遺物により古墳時代前期には埋没したものと考えられている。SD028には北東台地上に掘削された人工的な溝であるSD009・024・025・052・064が流れ込む。このうち009・024・025は調査区北西端では1本の溝(SD069とする)であるが、埋没するごとに南側に掘り直されている。これらの溝の底面標高は北東側が高くSD028側が低い。台地北側からSD028に水が流れていたと考えるのが自然である。溝は001を除いて粗砂で埋まっており、最終的にはI区全体に河川による粗砂が被った状態となっており、河川氾濫の激しさを物語っている。出土遺物(第13図013～028)はSD024・025・052の上に被った粗砂層(西側河川全体を覆う粗砂層をSD010とした。SD009から氾濫した砂層と思われる)から出土した土器片である。弥生時代後期から古墳時代にかけての遺物が多く出土した。028は滑石製で復元径が11cm前後と大きいことから石錘と思われる。

SD028(第18・19図) 調査区西隅に位置する旧河川である。調査区内では東岸のみの検出で幅等は不明で

SD077



SK081



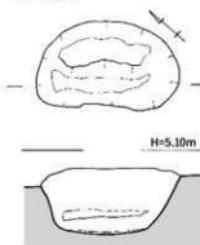
008



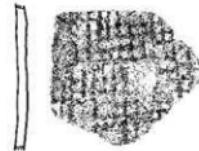
009



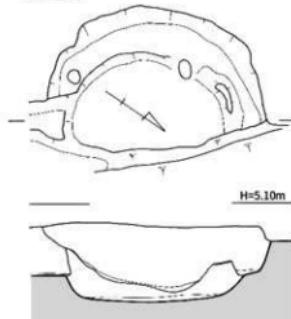
SK057



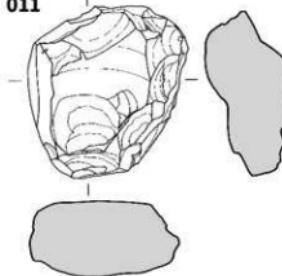
010



SK099



011



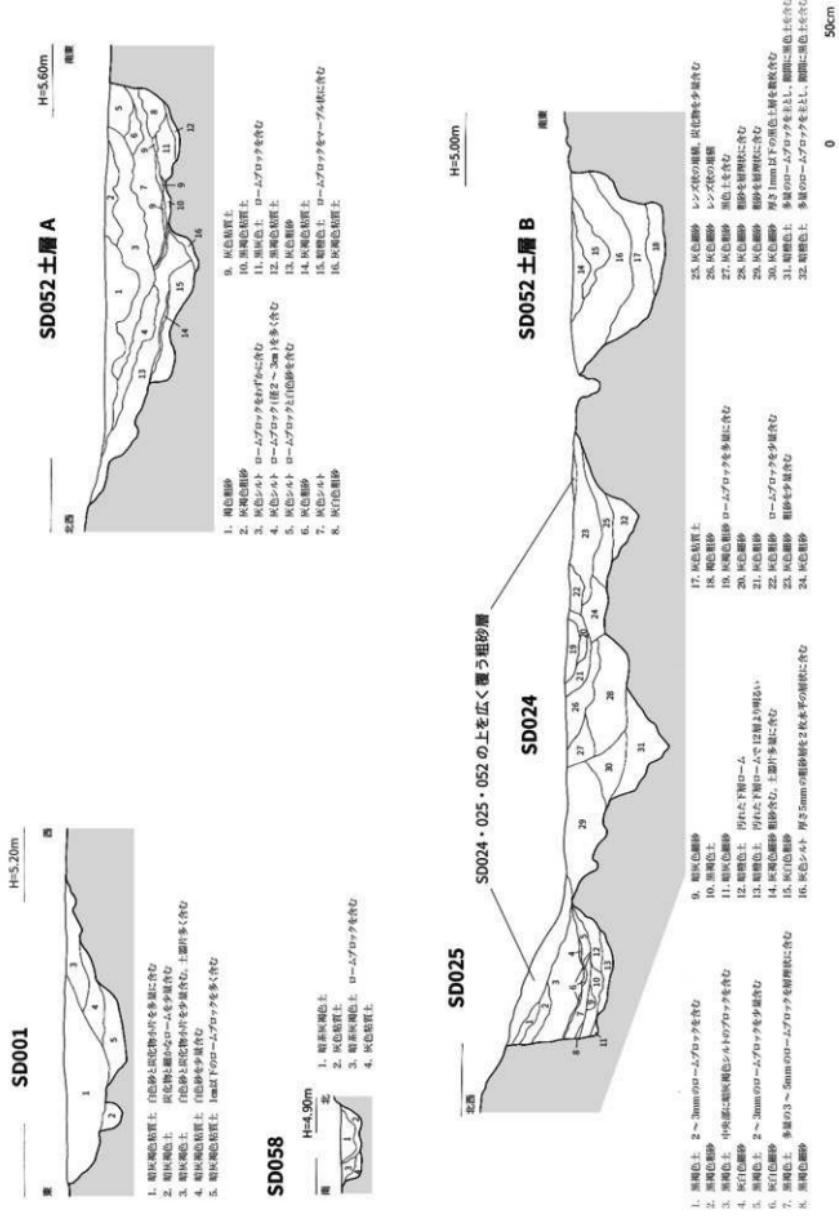
0 1m

012

0 10cm

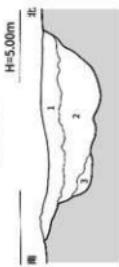
第10図 土坑・溝、遺構・遺物実測図

(SD077は1/40、SK057と099は1/30、SK081は1/20、遺物1/3)



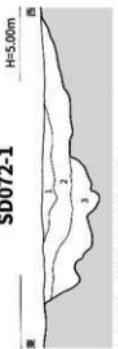
第 11 図 溝土層実測図 1 (1/20)

SD071



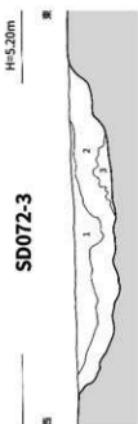
1. 黄褐色土、白色粘土テクスチャ11～20mmを多量に含む
2. 始点褐色粘土質土
3. 黄褐色土、ローランドテクスチャ

SD072-1



1. 黄褐色土、白色粘土テクスチャを多量に含む
2. 始点褐色粘土質土、ローランドテクスチャを含む
3. 黄褐色土、1～2mmのローランドテクスチャを含む

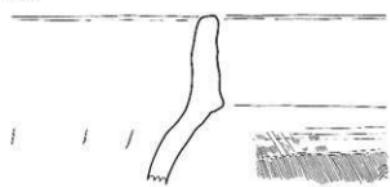
SD072-3



1. 棕灰褐色土、細粒の砂によどみガラン付着
2. 黄褐色土、新規土を含む
3. 粘土土、ローランドテクスチャを含む、鉛錆に褐色土を含む

第12図 溝土層実測図2 (1/20)

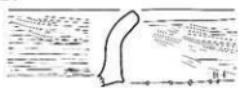
013



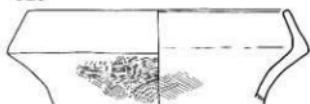
015



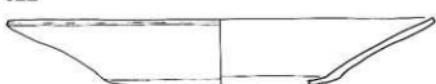
017



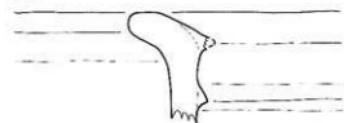
019



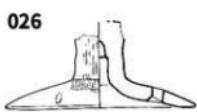
022



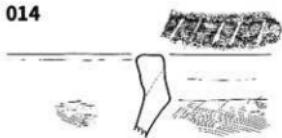
025



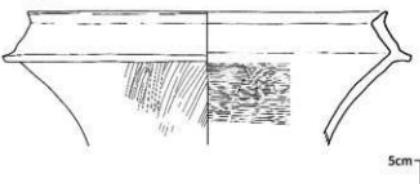
026



014



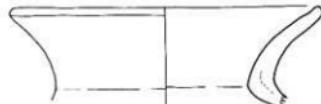
016



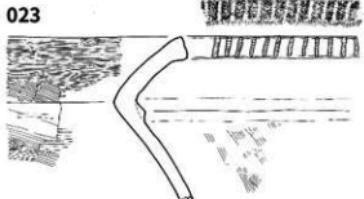
018



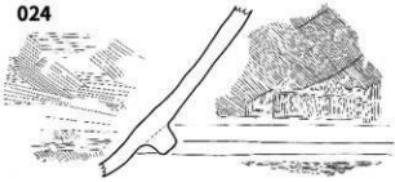
020



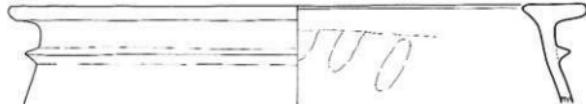
023



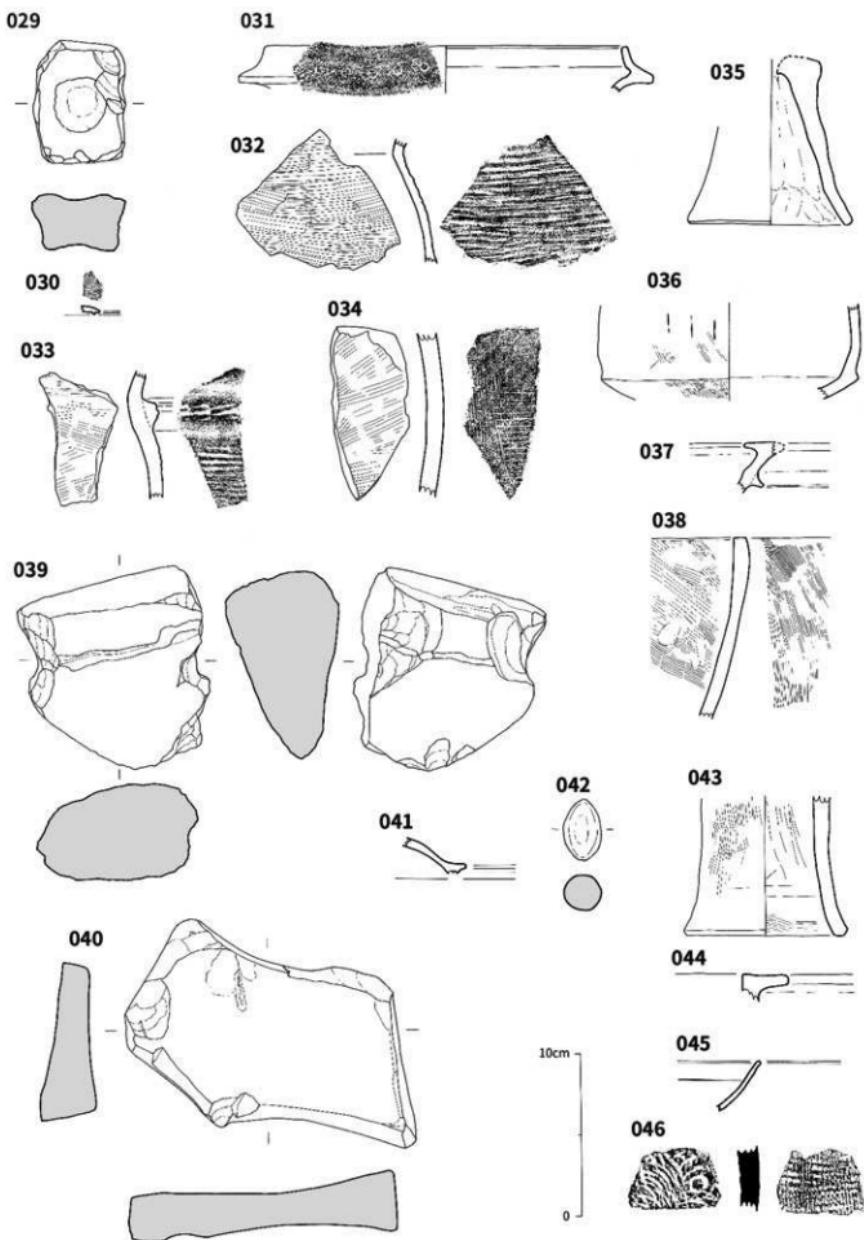
024



027



第13図 溝出土遺物実測図1 (1/3)



第14図 溝出土遺物実測図2 (1/3)

ある。第19図が河川を横断する土層図であるが、図によると東(図の右)側が埋没した後、西(左)側に新しい流れが見られる(第9～43層)。後述する杭列は右側の岸寄りが埋没した後に左側の流れに繋げるための掘り込みの護岸に伴う杭列と考えられる。

SD001(第11図) 調査区南西隅付近に位置する。若干蛇行しており、おおよそで主軸をN-3°～5°Eにとる。南北を意識して掘られたものと思われる。延長上にあるSD072もゆるやかに蛇行している点で同一の溝である可能性があるが、若干埋土などに違いがあるため番号を分けて報告する。調査区内で出土した他の溝と異なり、給排水の為ではなく区画溝である可能性が高い。SD001は調査区内で長さ5.8m、幅115cm、深さ25cmを測る。底面西側が1段低くなってしまい、東側にテラスがみられるが、第11図の土層図を見ると西側の深い部分は古い溝の底で、東側のテラス部分は掘り直した新しい溝の底部である。新しい溝の埋土は粗砂が多く含む暗灰褐色粘質土である。粗砂を多く含むことからある程度強い流れにより運ばれた粘質土が短い期間で埋没したものと思われる。古い溝である3～5層のうち5層は粘質土に細かなロームブロックを含んでおり、滯水した状態で壁面のロームがひび割れ等により剥落したもので、3・4層は緩やかな流れにより次第に埋没したものと思われる。出土遺物(第14図029)は凹石である。その他に弥生から古墳時代の土器初小片を多く含むが、最も新しい遺物としては須恵器壺蓋の小片が出土している。7～8世紀頃と思われる。

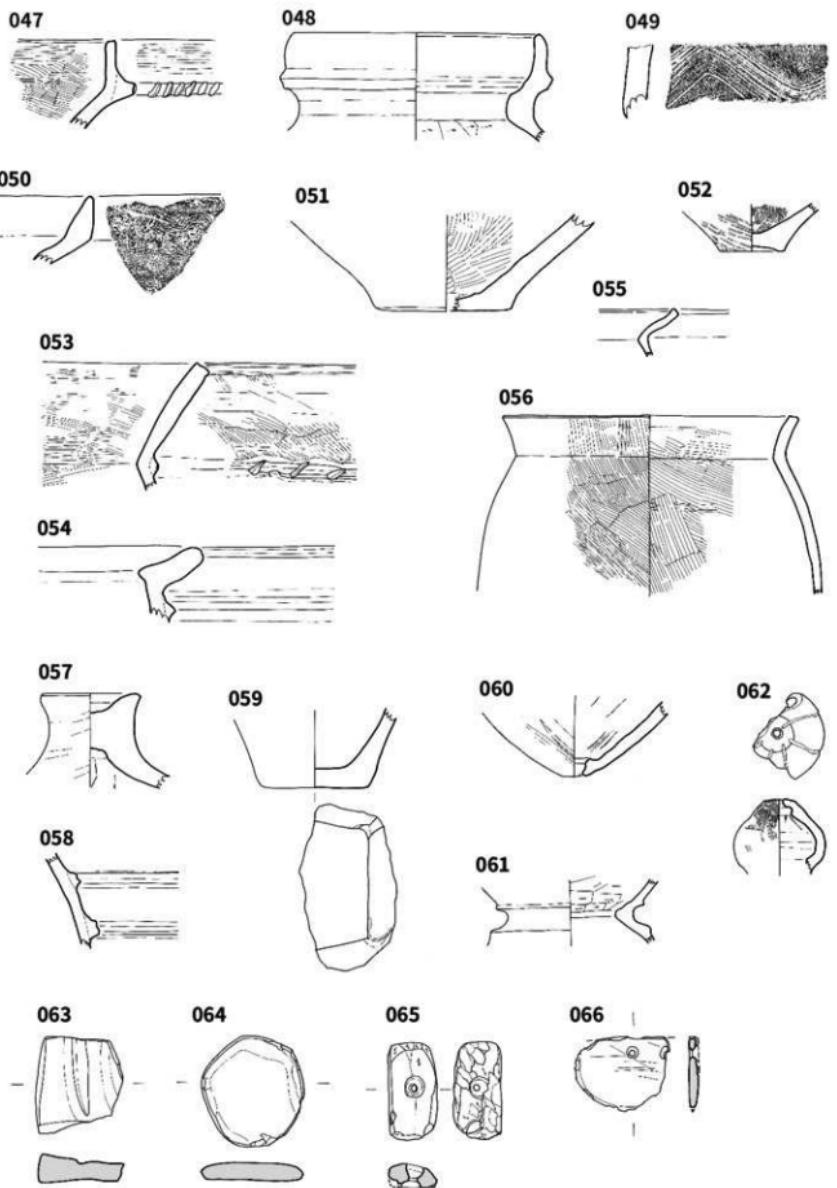
SD009(第5図) 調査区西端に位置し、旧河川(SD028)に注ぐ溝としては一番南側に位置し、時期は最も新しい。調査区北東端では主軸は南北に近く幅1.3-2.2m、深さは20cm前後を測り、断面は浅皿状を呈す。南側では弧を描いて幅を広げながら西へと向きを変えてSD028につながるが、西端部は削平によりほとんど消失しており、規模等は不明瞭である。底面全体に流れによる削平痕や木の根、小動物の生痕がみられる。滯水もしくは湿った状態であったと考えられる。埋土は粗砂で多くの土器片が出土した。遺物のほとんどが弥生～古墳時代(第14図031～039、第15図077)であるが少量の青磁・白磁片が出土している。古代末から中世初頭と考えられる。077は青銅製鋤先である。幅8.6cm、高さ4.9cmを測る。

SD024(第11図) 調査区西側に位置し、SD052に切られ、SD025を切る。主軸はN-24°Eを測る。調査区内で長さ17m、幅1.5～2.0cm、深さ50cm前後を測る。断面は北端では逆台形を呈するが、西側では凹凸が激しく、土層から29～31層、26～28層、19～21層、22～25層など数回にわたる掘り込みが行われている。埋土は粗砂で6世紀頃と思われる土師壺が出土した。時期的には古代末まで降る可能性がある。

SD025(第11図) 調査区西隅に位置し、SD024とSD064に切られる。調査区内での北端はSD024に沿うが、緩やかな弧を描き西に向きを変える。調査区内での長さ12m、幅80cm、深さ45cmを測る。断面は逆台形を呈す。埋土はレンズ状の堆積で黒褐色土と灰白色の細砂を主とする。黒褐色土が周辺表土の落ち込み、灰白色細砂が緩やかな流れによる堆積とすると、水が流れず落ち込んだ土が滞積する時期と水が流れる時とが繰り返していたと考えられる。SD025埋没後にSD024に南縁を大きく削られている。遺物は少なく弥生時代中～後期の土器が出土した。

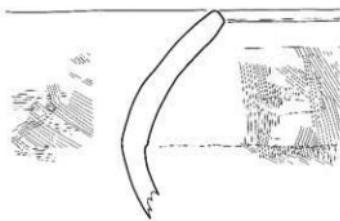
SD052(第11図) 調査区西側に位置し、SD009に切られSD024を切る。SD009同様に調査区北端では主軸は南北方向に近いものの、緩やかに西側へ弧を描き、旧河川(SD028)に合流する。調査区内で長さ20m、幅1.0-1.9m、深さ30cm前後を測る。断面は台地上では逆台形を呈し、レンズ状の堆積で粗砂、細砂、シルト等で分層した。SD028に近い土層Aでは堆積が複雑になっており、1～4層、5～12層、13～16層と3つに大きく分けることができる。土質は粘質土、シルト、砂で流れが様々に変化したことを示す。出土遺物(第15図067～076)。弥生時代中期から古墳時代前期の遺物が多いがSD024を切り、SD009に切られており6世紀から古代後半と考えられる。

SD058(第11図) 調査区の北西辺沿いに位置する。SD028との接点から東で主軸をN-53°Eにとるが、2.5m程でN-38°Eに向きを変えて調査区外に出る。調査区内での長さ7.2m、幅35～40cm、深さ8cmを測る。土層から1度の掘り直しがみられる。新旧とも底面直上は灰色粘質土で上～中層は暗茶灰褐色土である。底面に粘質土があることからわずかに滯水していたものと思われる。埋土中からガラス瓶等が出土した。近現代の田畠に伴

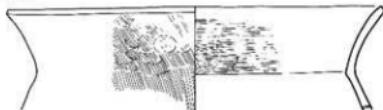


第15図 溝出土遺物実測図3 (1/3)

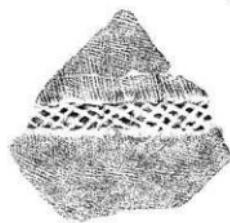
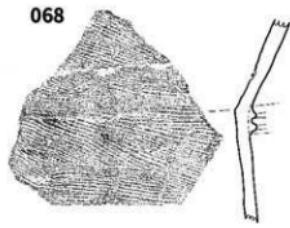
067



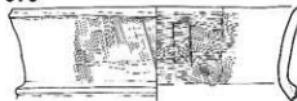
069



068



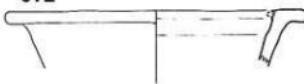
070



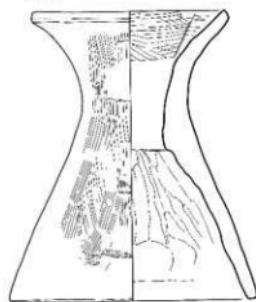
071



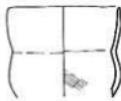
072



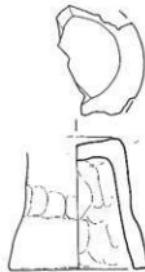
073



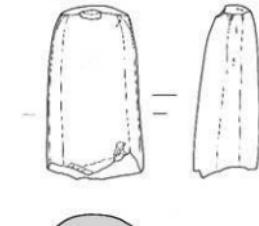
074



075



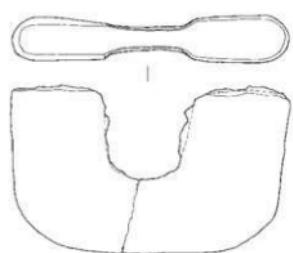
076



0

10cm

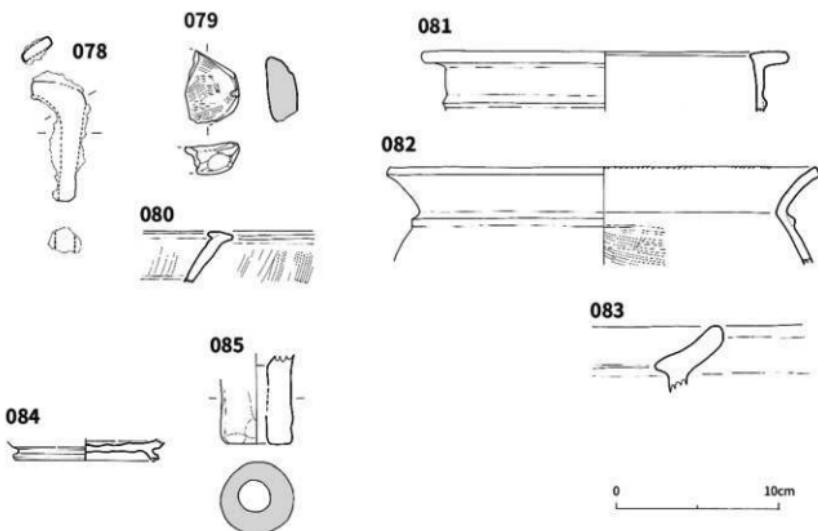
077



-



第16図 溝出土遺物実測図4 (1/3・077は2/3)



第17図 溝出土遺物実測図5 (1/3)

う排水路である。東側を流れるSD071は別の溝である。

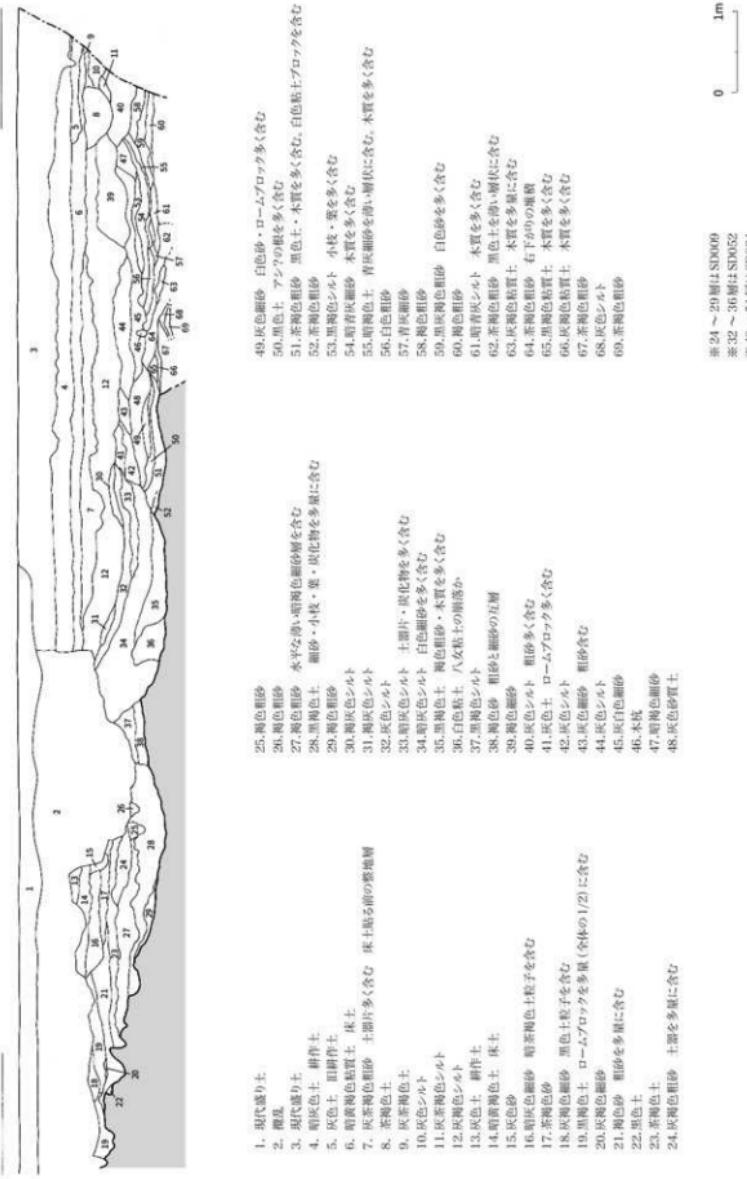
SD064 (第5図) 調査区西端に位置する東西方向の溝でSD024とSK066に切られ、SD025を切る。主軸はN-72°-Wで、遺存長1.2m、幅1.0～1.2m。深さ16cmを測る。北岸沿いにテラスをもつ。埋土は粗砂で、弥生時代中～後期の土器が出土した。

SD071 (第12図) 調査区の北辺沿い中央部に位置する。SD072に切られる。SD058と同じ方向に流れるが別の溝である。蛇行しているが主軸はN-60°-E前後を測る。調査区内での長さ13.2m、幅0.8～1.35m、深さ深さ28cmを測る。断面は逆台形を呈し、埋土は上半が灰褐色土、下層が暗灰褐色粘質土で流水の痕跡はみられない。調査区中央のSD072と重なる所で向きを北に変えて調査区外にでる。SD072から分岐もしくは付け替えられた可能性がある。遺物は6世紀後半代の須恵器甕や壺が出土しているが、SD072との時期差があるとは思えないため、072よりやや古い時期になると思われる。

SD072 (第12図) 調査区の北辺中央に位置し、やや蛇行気味であるが、主軸はほぼ南北方向である。攪乱により分断されており072-1～3に分けたが、072-3はやや離れており、幅が異なる。南側の延長上にSD001がある。調査区内での長さは17m、幅0.7～1.0m、深さ21cmを測る。底面は木の根痕や生痕などが多く見られる他、西壁に沿って部分的に深掘りされるなど凹凸が多い。埋土中から白磁碗V類の破片が出土した。11世紀後半～12世紀前半頃と考えられる。

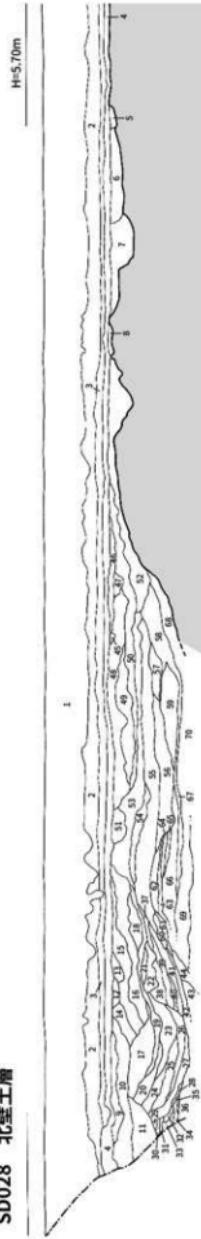
SD074 (第5図) 調査区中央北寄りに位置する。SD072を切る。東端は攪乱に切られており、現状で長さ3.3m、幅42～65cm、深さ10cmを測る。底面には不規則に凹凸がある。埋土は灰茶褐色を呈し、3～5cmのロームブロックを多量に含み、また黒色土を若干含んでいる。埋土中からは土器小片が出土した。古代末以降である。

SD094 (第12図) 調査区北辺に沿って中央から東側にかけて検出した。調査区内での長さ17m、幅28～62cm、深さ7～20cmを測る。主軸はN-50°-Eで現在の地割りに近い。断面は逆台形で埋土は灰色土を主とする。SD058同様近現代の田畠に伴う給排水用の溝と思われる。

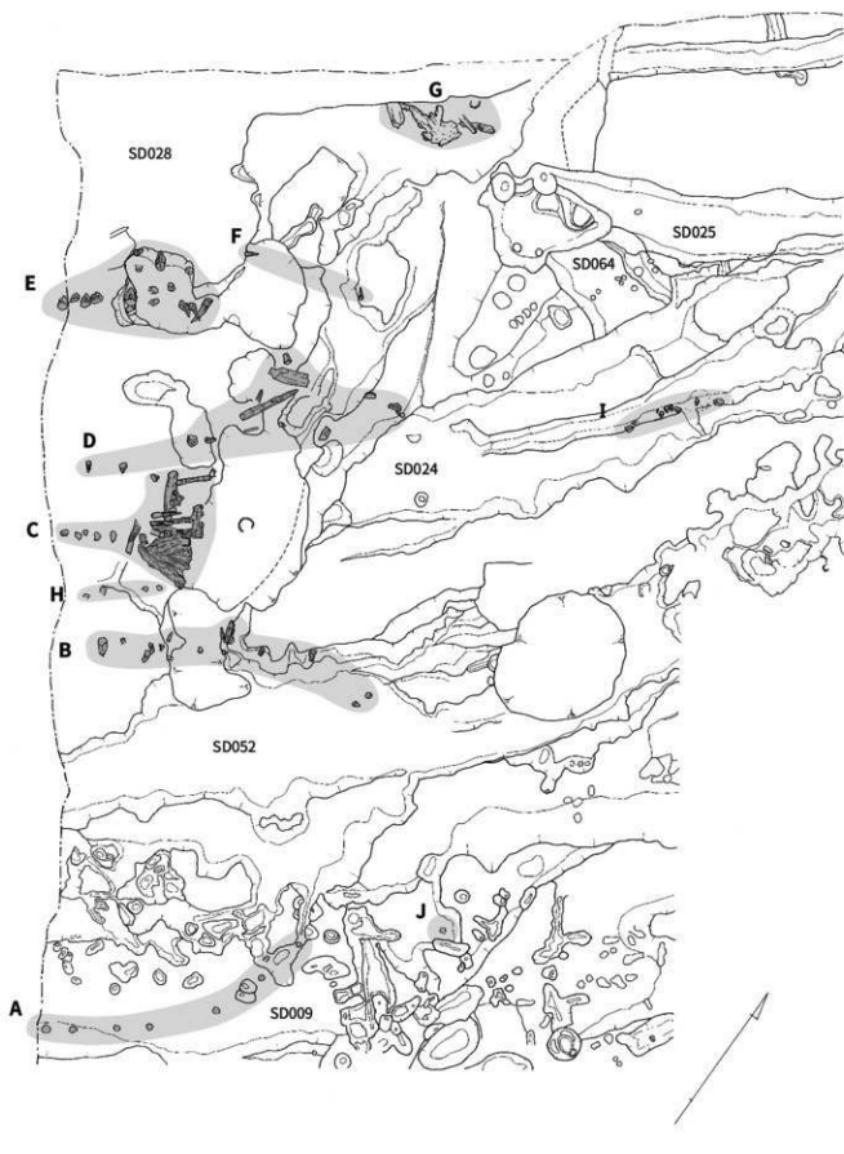


第18図 旧河川土層実測図1(1/60)

SD028 北壁土層

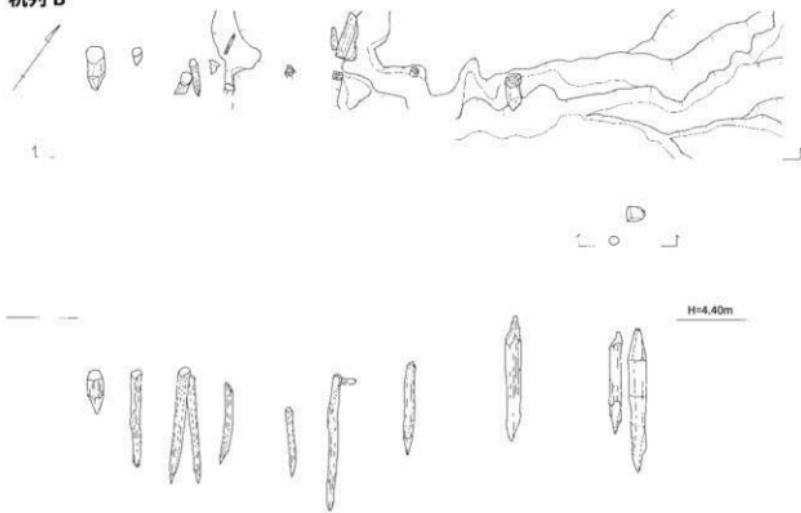


第19図 旧河川土層実測図2 (1/60)

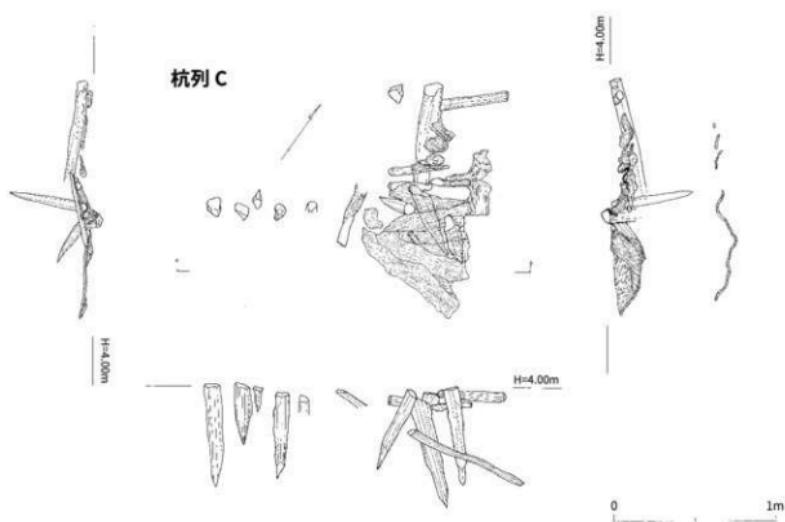


第20図 桁列平面実測図(1/60)

杭列 B

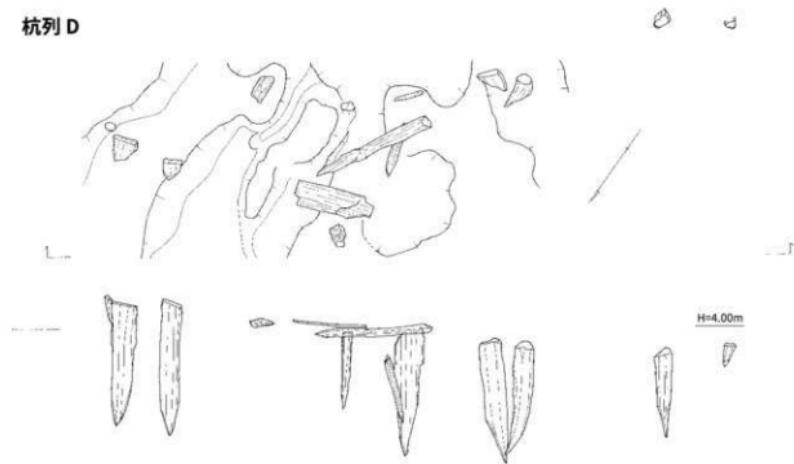


杭列 C

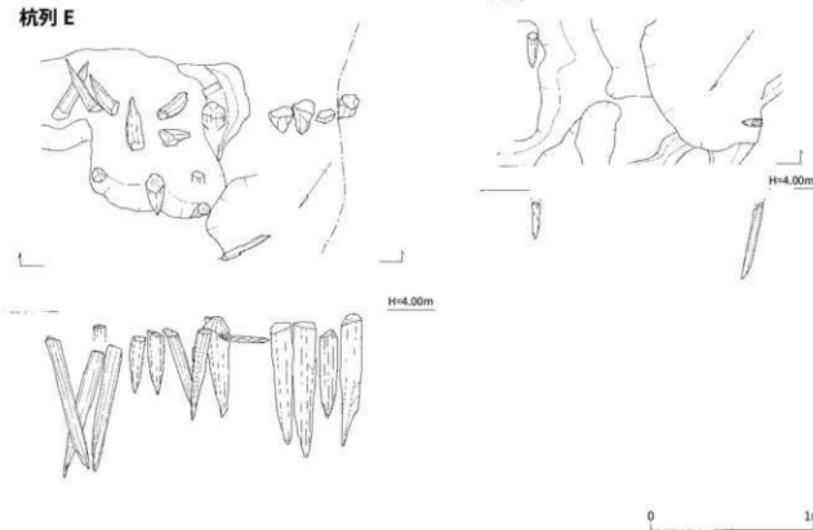


第21図 杭列 B・C 実測図 (1/30)

杭列 D



杭列 E



第 22 図 杭列 D・E・F 実測図 (1/3)



第23図 桁列H・I・J実測図(1/3)

(6) 桁列(第20～23図) 丘陵上を流れる溝はSD028に繋がるが、当時SD028の流れが岸から4m程離れていたため、SD028の粗砂層に溝掘り込む必要があった。粗砂で壁が崩壊しやすいため護岸を行い、それに伴う杭列と考えられる。

杭列A SD052の南壁沿いに7本の杭が並ぶ。木質は消失しており杭痕跡のみの遺存である。

杭列B SD052の北岸沿いに11本の杭が並ぶ。

杭列C SD024北岸はD列、南岸をH列とすると、その中央に位置する。8本の杭列と筵状植物質とそれにからむ横倒しの棒で、横倒しの棒の先端は尖っておらず、壁の護岸とは異なると思われる。SD024が魚が住める環境であれば築である可能性もあるが、SD028の護岸の可能性もあると思われる。

杭列D SD024の北岸沿いに10本の杭が並ぶ。東側は板材、西側は棒杭を使用する。横倒しの⑧も片方が尖らせてあり、杭である。⑨は板材である。

杭列E・F SD028の東縁から中央に延びる。Eの一部は崖みの中に集中して打ち込まれている。井戸の一部である可能性がある。

杭列H SD024の南縁延長に打ち込まれた4本の杭列で、護岸用である。

杭列I SD024の古い掘り込みの北岸沿いに打たれている。SD009やSD052によって貯まった粗砂層に掘り混まれており、護岸用の杭と思われる。

4 小結

133次調査で検出した主な遺構は弥生時代中期前半の円形竪穴住居1基、貯蔵穴1基、甕棺1基、柱穴群で、いずれも削平を受けており遺構の遺存状態は不良であった。その後は古墳時代後期に土坑と方形竪穴式住居の壁溝の可能性がある溝が1条、中世の土塙墓と思われる土抗1基、16世紀の可能性がある土坑1基である。全体的に遺構密度は薄い。調査区の半分近くが攪乱で削平されていることや水田造成時に表面も削平を受けているため消失した遺構も多いと思われるが、攪乱断面等にかかる遺構も少ないと考えると、周辺調査区に比べて元々遺構密度は薄かったと考えている。溝からは多くの遺物が出土した。133次調査で出土したコンテナケース90箱のうち2/3程度は河川・溝からの出土である。遺物は弥生時代中期から古墳時代を主とする。溝底面のレベルから水の流れを北側の台地端部から南側の旧河川(028)へとしたが、北側台地上では貯蔵穴や竪穴式住居など弥生時代前期から中期の遺構が主で、弥生時代後期などの遺構は少ない。ただ、106次調査のSD001でも出土遺物は同様の傾向があり、近隣に弥生時代後期の集落や甕棺墓群が存在した可能性はあるものと思われる。

比東遺跡第33次調査 遺構一覧 1

遺構番号	性状	時代	遺物	備考
001	溝	7～8世紀	須磨帯大器。須磨帯環壺。(7～8世紀)。甕(弥生中期前半)、高环(弥生中期前半、古墳後期)、砾石(石英岩石圓岩) 織型の転用か)。	小片のみ
002	掘孔	現代	黒曜石片(1点)	
003	河川底面塗み	弥生時代後期中頃	甕(弥生後期中頃)、織程(弥生後期)、土器小片	
004	河川底面塗み	不明	土器片(1点)	
005	河川底面塗み	不明	貝(ウニ?)、土器小片(4点)	
006	柱穴	弥生時代中期	甕(小片1点 弥生時代中期)	円形住居
007	生痕	不明	土器片(弥生土器)	
008	生痕	不明	土器片(2点 不明)	
009	溝	古代末～中世	青磁片、白磁片、甕(古墳前頭、弥生中期)、甕(古墳前頭、弥生後期、弥生中期)、大型甕(弥生後期中頃)、高环(古墳前頭、弥生中期中頃)、要程(弥生中期中～後半、弥生後期)、器台(弥生中期)、土器片(小片多 ほどんど弥生中～後 わざかに土器器蓋混在)	
009周	不不明		甕(弥生中期)、甕?、土器小片	
010	溝	弥生時代中期	甕(古墳前頭、弥生後期中頃)、甕(弥生中期)、高环(古墳前頭、弥生中期)、要程(弥生中期中～後半、弥生後期)、器台(弥生中期)、土器片(小片多 ほどんど弥生中～後 わざかに土器器蓋混在)	
010上層相鉢			甕(弥生中期～後期)、器台(弥生後期～古墳)、甕(弥生中期後半、弥生後期)、土器片(小片少 摩滅著しい)	
009・010	河川	古墳時代前期	甕(後期後半)、甕(後期中期～中頃)、甕(中期後半)、大型甕(後期後半)、要程(後期後半)、器台(後期後半)、土器片(小片少 摩滅著しい)	▼様式系の器台、甕、土器片を数点ずつ含む
010・024・025			要程(弥生中期後半～中頃)、甕(古墳前頭)、要程(後期後半)、要程(中期後半)、要程(後期後半)、器台(後期後半)、土器片(小片少 摩滅著しい)	
010・063			甕(古墳前頭、弥生後期末、弥生中期)、甕(弥生後期中頃、弥生中期)、土器小片(少 摩滅著しい)	
011	柱穴			円形住居
012	柱穴	弥生時代	土器小片(1点 不明)	円形住居
013	柱穴			円形住居
014				
015	掘孔		タイル(現代)、土器小片(2点)	
016	柱穴	弥生中期前半	甕(小片1点 弥生中期前半)、土器小片	円形住居
017	柱穴			円形住居
018	柱穴	不明	土器片(小片 1点)	円形住居
019	柱穴	弥生時代?	土器小片(3点 弥生土器)	円形住居
020	柱穴	不明	土器小片(2点)	円形住居
021	柱穴	不明	土器小片(1点)	円形住居
022	柱穴	弥生時代中期中頃	甕(弥生中期中頃)	円形住居
023	柱穴			
024	溝	6世紀	似非須磨土器部?(6世紀)、甕(古墳前頭、弥生後期中頃、弥生中期中頃、弥生前頭後半)、甕(古墳前頭～縁に波状紋、弥生前頭、弥生後期中頃、弥生中期中頃)、要程(弥生中期)、土器小片多、投げ(1点)、黒曜石片(1点)、安山岩小円盤	似非須磨土器部?土器片多量
025	溝	弥生時代中～後期	甕(弥生中期中頃)、器台(弥生中期)、高环(弥生中期)、要程(弥生中期)、土器片(小片少)、投げ(1点)	小片のみ
024・025・052	河川	古墳時代前期	甕(弥生中期中頃)、要程(弥生中期後半)、長程(弥生中期)、甕(弥生中期中頃、弥生後期)、弥生後期、要程(古墳時代)、二重口縁甕(弥生後期～古墳前頭)、要程(弥生中期)、土器片(古墳時代初期)、土器片(多)、黒曜石片(1点)、石鐘乳(1点)、安山岩小円盤	コンテナースト 10箱程
026	河川底面塗み			
027	河川全体一段下げ	弥生時代後期	甕(弥生中期)、甕(弥生中期)、高环(弥生後期)、織程(弥生後期)、土器片(多 多くは要程)、黒曜石片(1点)、安山岩小円盤	
027核				
028	河川	弥生時代中期中頃	甕(小片多 中頃)、甕(後期)、要程(後期)、甕(後期)、土器片(多)、投げ(1点)、安山岩小円盤(安山岩)	
028E	河川		瓦(平瓦 中世以前)、甕(後期後半、弥生中期)、甕(後期後半～後期後半)、高环(後期後半～後期後半)、要程(後期後半)、土器片(1点)、安山岩小円盤	
028F	河川	不不明	土器(小片 1点)	
028G	河川	古墳時代前期	甕(古墳前頭、弥生後期)	
029	柱穴			円形住居
030	生痕	弥生時代中～後期以降	高环(弥生中～後期)、土器小片(3点)	
031	柱穴	弥生時代中期前半?	甕(弥生中期前半)、土器小片(弥生中期前半)	円形住居
032	柱穴	不明	土器小片(1点)	
033	柱穴	弥生時代	甕(2点 弥生時代)、土器片(1点)	
034	柱穴	弥生時代中期	甕(弥生中期)	
035	柱穴			円形住居
036	掘孔	現代	甕(弥生後期)	
037	河川底面塗み	古墳時代前期	甕(弥生中期前半～中頃)、甕(古墳前期、弥生後期)、小型丸底甕、高环(弥生中期)、土器小片(多)	いずれも小片
038	生痕			
039	生痕	弥生後期以降	土器片(弥生後期?)	
040	生痕	古墳時代	大型甕(後期後半)、陶(古墳)、甕(古墳?)	
041	生痕	古墳時代	甕(後期後半)、甕(古墳時代)、土器小片(多 摩滅著しい)	
042	生痕	不明	土器片(3点)	
043	掘孔	不明	土器片(6点)	
044	掘孔	弥生後期以降	甕(後期後半)、土器片(1点)	
045	生痕	弥生後期以降	甕(後期後半、弥生中期中頃)	
046	生痕	古墳時代前期	甕(後期後半)、甕(後期後半)、甕(古墳前頭、弥生後期)、土器小片	
047	生痕	弥生時代終末	甕(後期後半)、甕(後期後半)、不不明土製品、土器小片	
048	生痕	不明	土器片(小片 4点)	
049	生痕	古墳時代前期	甕(古墳時代前頭、弥生中期中頃)、甕(後期後半)、土器小片(多)	
050	生痕	弥生時代後期後半以降	甕(後期後半)、土器小片(4点)	
051	生痕	弥生時代	甕(弥生中期)	
052	溝	古代	器台(1点 古墳時代前頭)、甕(後期後半)、小型丸底甕(古墳前頭)、板(?)、高环(弥生中～後期)、要程(後期後半)、要程(後期後半)、土器片(多) 多くは弥生後期から古墳時代)、黒曜石片(1点)、凹石(1点)、砂岩(1点)、磨製石器(玄武岩) 3点、安山岩小円盤(6点)	小片が多い
053	河川底面塗み	弥生時代後期～古墳時代	甕(古墳時代前頭、弥生中期)、甕(後期後半)、要程(後期後半)、土器片(少)	
054	河川底面塗み	古墳時代前頭	甕(古墳時代前頭)、大型丸底甕(小片)、土器小片	
055	河川底面塗み			
056	河川底面塗み	古墳時代前期	甕(古墳時代前頭、弥生中期)、大型二重口縁甕(古墳時代)、高环(後期後半)、中期中頃)、器台(弥生中期?)、小型丸底甕、要程(後期後半)、土器片(小片 多くは弥生中期)、不不明土片	

比恵遺跡第33次調査 遺構一覧 2

遺構番号	性格	時代	遺物	備考
057	河川底面僅み	古代末～中世	甕(古墳時代前期、弥生後期半、弥生後期、中期、前期後半)、土器片(表面に格子状タタキ?古墳後期)、甕(弥生後期後半、弥生中期)、甕(弥生後期)、甕(弥生後期)、甕(弥生後期)、土器片(土器底が若干温じる)、黒曜石(安山岩)	
058	溝	近現代?	ガラス(近現代)、甕(大型 古墳時代)、甕(弥生後期-古墳)、土器片(土器底が若干温じる)、甕(安山岩)	
059	溝底	現代	甕(生後後期)、甕(生後後期半)	
060	土坑?荷川底面凹凸	古代末～中世	甕(生後中期、弥生後期)、甕(生後後期)、高环(弥生中期～後期)、土器片(不明)	
061	河川底面僅み	古代末～中世	甕(生後中期)、甕(生中期～中世)、甕(弥生中期～後期)、土器片(小片)	
062	河川底面僅み	古代末～中世	甕(生後中期)、土器片(土器底が若干温じる)、甕(安山岩)	
063	河川底面僅み	古墳前後期～後期	甕(古墳前後期～後期)、甕(生後後期)、高环(古墳前期、弥生中期中頃)、甕台、甕(弥生後期、中期中頃)、黒曜石(1点)	遺物コンテナケース1箱
063上かぶり(床 土坑?)	現代	土器片(複数)		
064	溝	弥生時代中～後期	甕(生後中期)、甕(弥生中期～後期)、土器片(多 ほぼ生後器か)	
065	生痕	古代	甕(生後期)	
066	土坑?			
067	柱穴	弥生時代中期以降	甕(小片 1点 弥生中期以降)、土器片(小片3点 不明)	
066-067		甕(2点 弥生後期)、土器片(小片 3点 不明)		
068	河川底面僅み	古代	甕(生後中期)、高环(生後後期末)、土器片(小器 小器(生後後期便か))	
069	溝	古代末～中世	甕(生後中期前半)、甕(生後後期)、二重口縁甕(生後後期)、小型丸底甕、甕台(弥生中期～後期)、甕(弥生中期～後期)、尖鉄器?、土器片(小片多 摩滅らしい)	
070	河川底面僅み	不明	土器片(小片 1点のみ)	
071	溝	11世紀後半～12世紀	須磨器(要片 3点)、須磨器片(6C後半)、須磨器蓋?、健甕(弥生中期 後期)、甕(弥生後期、古墳時代前半大型)、高环(弥生中期)、甕(弥生中期)、土器片(多)	
072-1	溝	11世紀後半～12世紀	白磁碗(底)、須磨器蓋?、甕(弥生後期)、甕(弥生後期)、土器片(多)	SD071 - 091 を切る
072-2	溝	11世紀後半～12世紀	須磨器蓋?、甕(弥生中期)、土器片(多)	
072-3	溝	11世紀後半～12世紀	須磨器蓋?、甕(弥生中期)、土器片(多)	
073	埋乱	現代	土器片、土種	
074	溝	不明	土器片小片(14点)	
075	埋乱	現代	白磁小瓶(現代)、甕(弥生後期)、土器片(少)	
076	縫穴住居底床瓦方	古墳時代後期?	土器容器裏? (片 小片 ハガ記号?有り)、土器片(3点)	
077	縫穴住居雙溝	古墳時代後期?	土器片(1点 不明)	
078	土坑	古墳時代後期	須磨器蓋 or 坂坪(古墳時代後期)、土器片(1点)	
079	生痕	不明	土器片小片(1点のみ)	
080	生痕	古墳時代後期?	高环? (古墳時代か)	
081	土壙壁?	14～16世紀	土師杯(光沢 手切り 1点)、染付(極小片)、土器片(6点)	
082	生痕	不明	土器片(1点 不明)	
083	柱穴	不明	土器片(1点 不明)	
084	河川	古代末?	甕(生後中期)、甕(弥生中期中頃～後期後半、古墳前期)、甕(破片多 弥生中期、弥生後期)、大型甕(弥生後期～古墳前期)、小型丸底甕、高环(古墳時代前半、弥生後期中頃、弥生中期中頃)、甕(古墳初頭)、器台(弥生中期、弥生後期中頃、弥生末?)。甕(弥生中期、弥生後期)、瓶型堅耳甕、凹石、砂砾(砂岩)、石刨丁、黒曜石(判別 2点 製造 1点)	土器片 コンテナケース10箱型、曳引車用中型10箱型、古墳時代前半弥生後期以降の遺物が多い。ほとんどの片で厚漬が差し。
085	柱穴	弥生時代か?	土器片(小片 2点 弥生中期)	
086	土坑	12世紀後半	須磨器蓋と青磁器1個、須磨器蓋、瓦質鉢、土器片小片	
087	包含層?		小破(ひびき) (通産)	
088	埋乱	現代	須磨器蓋、土器片(小片 8点)、黒曜石片(1点)	
089	溝狀土坑	古墳時代後期以降	須磨器蓋、馬糞、土器片小片(5点)	
090	生痕	不明	土器片(4点)	
091	溝	不明	土器片(7点)	072 に切られる
092	柱穴	不明	土器片(1点)	
093	柱穴	不明	土器片(1点)	円形住居
094	溝	古墳時代末～古代初期	須磨器蓋(小片 2点)、須磨器片(小片 1点)、甕(弥生中期)、土器片(多)	
095	北	縫穴	甕(小片 不明)、甕(弥生後期後半、中期前葉)	
095	南	縫穴	甕(弥生中期中頃)、黒曜石(1点)	
096	甕(入り口)壁			
097	甕板	弥生時代中期前葉		
098	柱穴	弥生時代中期中頃	甕(弥生中期中頃)	
099	土坑	16世紀?	須磨器蓋と青磁器と小瓶(16C?)、土器片(3点)	
100	柱穴	古墳時代以降か?	甕板(弥生中期前半 ST 097の一部)、土器片(2点 1点は土器覆か)	ST097を切る
101	溝	弥生時代後期後半以降	甕(生後後期後半)、土器片(7点)	
102	溝	不明	土器片(1点)	
103	溝	古墳時代後期以降	土師甕(須磨器蓋) 平行・青海波紋タタキ)、土器片(12点)	
104	柱穴	不明	土器片(2点)	
区段表			甕(須磨前頭、弥生中期)、甕(古墳前頭)、土器片、基盤(鋸形の転用か)	
区段表採			甕(須磨前頭)、高环、高环、甕(古墳前頭)、土器片(多)	
区段南側口～ム之上			土器片(2点)	
区段南側口包含層			甕(小片 2点 弥生前中期～前葉)、甕(5点 前期後半 瓶部に絞杉文)、土器片(多)、甕(前葉後半、中期前半?)、甕板、黒曜石片(1点)	
区段北			甕(生後後期半～中期前葉)、甕(古墳前頭)、土器片(多)、甕(前葉後半、中期後半 瓶部に絞杉文)	
区段壁面清掃			甕(小片 2点 生後後期半、中期前葉)、甕(中期前葉)、黒曜石片(1点)	
区段北採			甕(生後後期半～古墳前頭)、甕(中期前葉)、甕(古墳後期～古墳)、土器片(小片多 摩滅らしい)	
区段換			甕(小片多 弥生中期後半～中期前葉)、甕(生後後期)	
区段底部			甕(小片多 弥生時代前葉半が主で中期前葉が數点)、甕(中期前葉後半、瓶部に絞杉文)、大型甕、甕板(弥生中期前葉)、黒曜石片(7点)	
区段谷部上層			甕(小片多 弥生前中期)、甕(前葉後半)、高环(生後後期前葉)、甕(小片)、甕板(前葉末、中期初頭)、筋輪牽?	
区段中層褐色土			甕(小片多 弥生中期後半～中期前葉)、甕(中期前葉)、甕板(中期前葉)、黒曜石片(7点)	
区段壁面清掃			甕(小片多 弥生中期前葉)、甕(中期前葉半)、不明土製品	
不明			土器片(3点)	
甕蓋部裂け下げ			甕(台面)甕(片 2点 近代以前)、陶杯、甕蓋無無蓋、須磨器蓋高台付杯(7C後半 BC)、須磨甕(古墳時代)、土師甕(古代末)、高环(古墳前頭)、弥生中期中頃)、甕(弥生中期)、甕板(弥生中期～後期)、土器片(生後器が多)、黒曜石片(2点)	遺物多い



1. I 区全景（東から）



2. SC01 (南から)



3. SP022 柱痕跡（西から）



4. SP011 柱痕跡（北から）



5. SP013 柱痕跡（南から）

図版 2



1. SP029 柱痕跡（北から）



2. SP092 柱痕跡（南から）



3. I 区北側溝（東から）



4. SD009 青銅製動先出土状況



5. SD009 溝底面遺物出土状況（北西から）



6. SK057 遺物出土状況（南西から）



7. SD024 遺物出土状況（北西から）



8. SD084 遺物出土状況（南東から）



1. SD028 (北から)



2. 杭列 B (南東から)



3. 杭列 C (南西から)



4. 杭列 D (南から)



5. 杭列 D (北から)



6. 杭列 E (西から)



7. 杭列 G (北から)



8. 杭列 I (南西から)

図版 4



1. SD028 西壁土層（東から）



2. SD028 北壁土層（南から）



1. SD001 (西から)



2. SD001 土層 (北から)



3. SD024・025 (西から)



4. SD024 土層 (西から)



5. SD025 土層 (西から)



6. SD052 土層 A (南西から)



7. SD052 土層 B (西から)



8. SD074 (北から)

図版 6



1. II 区全景（北東から）



2. SD058 土層（南西から）



3. SD071・072 切あい（北から）



4. SD071 土層（北東から）



5. SD072-1 土層（北から）



1. SD072 - 2 (西から)



2. 貯蔵穴南側土層（東から）



3. 貯蔵穴北側土層（東から）



4. 貯蔵穴完掘状況（北東から）



5. ST097・096 土層（北から）



6. ST097・096（北から）



7. SK081（西から）



8. SK086（西から）

図版 8



1. III区全景（南西から）



2. III区東側拡張部（西から）

報告書抄録

ふりがな	ひえ							
書名	比恵 73							
副書名	比恵遺跡群第133次調査報告							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第1295集							
編著者名	屋山洋							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	福岡市中央区天神1丁目8-1							
発行年月日	2016年3月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東經	発掘期間	発掘面積 m ²	発掘原因
ひえいせきぐん 比恵遺跡群第133次	ふくおかはかたく 福岡市博多区 博多駅南4丁目 163番1	市町村 40137	遺跡番号 0127	33°34'53"	130°25'46"	20140714 ～ 20141128	1108m ²	寺院建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な造構		主な遺物	特記事項		
比恵遺跡群第133次	集落	弥生時代～中世	堅穴式住居・渡船・貯蔵穴・ 土坑・溝・旧河川		弥生土器・土師器・須恵器			
要約	弥生時代前期から中期には堅穴式住居や渡船など集落が形成されるがその後弥生時代後期から古墳時代には西側の旧河川に向かって溝が掘られるようになる。古代米から中世になると溝の他に土坑敷基が見られるようになり再び集落が形成されるようになる。弥生時代末～古墳時代前期の溝からは50箱以上の遺物が出土した。弥生時代中期が最も多く、弥生後期から古墳前期と思われる土器片が若干混じる。							

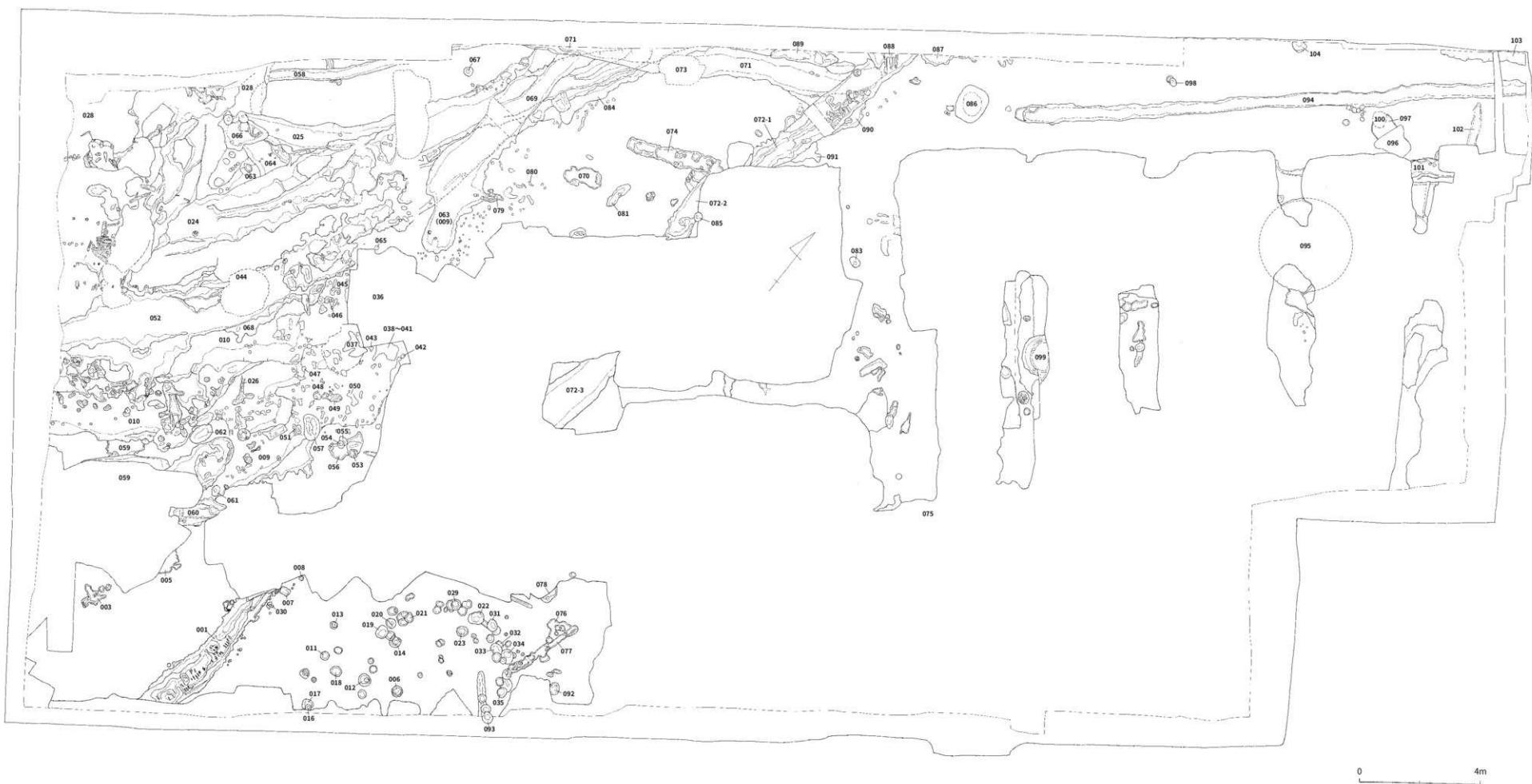
福岡市埋蔵文化財調査報告書第1295集

比恵 73

—比恵遺跡群第133次調査報告—

2016年(平成28年)3月25日

発行 福岡市教育委員会
 福岡市中央区天神1丁目8-1
 印刷 木松印刷株式会社
 福岡市博多区東那珂2丁目4-36



比惠遺跡群第133次調査区全体図 (1/100)